

有明高専

# 図書館報

No. 13



- ◆ 巻頭言……………2
- ◆ 特集 新しくなった図書館紹介 ……3~7
- ◆ 新任教員推薦図書……………8
- ◆ 読書感想文コンクール ……9~14
- ◆ 図書館統計 ……15
- ◆ 郷土の文化財・編集後記 ……16



## 巻頭言

図書館長 焼山 廣志

# 画龍点睛

～有明高専図書館が再生しました～



昨年「図書館倶楽部」87号で、「千の風になって」の一文に寄せて、有明高専図書館の再生を心待ちしようと訴えた時から半年以上が経ち、今年二月やっとその時を迎えることが出来ました。耐震工事と図書館の内装工事が無事に済み、又学生諸君がリニューアルされた図書館棟に集い始めてくれている今、思うことが一つあります。よく知られている中国古典籍からの故事です。

又金陵安樂寺四白竜、不点眼睛。每云、点睛即飛去。人以為妄誕。固請点之。須臾電破壁、兩竜乘雲、騰去上天。二竜未点眼者見在。（『歴代名画記』巻七）

**訳文** 南朝の梁（502～557）の張僧繇は吳中の人で有名な画家であった。金陵（＝南京）の安樂寺という寺の壁に四匹の白い竜の図をかいたが、その竜に瞳をかき入れなかった。いつも「もし瞳をかき入れたら、この竜はすぐ飛んで行ってしまふよ。」と言っていた。人々は彼がでたらめを言っていると思い、是非とも瞳をかき入れるように求めた。かれがそこで二匹だけ瞳を入れると、しばらくして雷が鳴り、稲妻が走り、壁が壊れ、瞳をかいた二匹の竜は雲に乗って天に飛び上がり行ってしまった。まだ瞳をかき入れなかった二匹の竜は今でもその寺に残っている。（『中国故事成語辞典』金岡照光編 p.143 三省堂）

今の改装された有明高専の図書館棟は上の故事に例えれば、四匹の白竜です。そしてこの有明高専の図書館棟に、本当の意味で実用の「用」をなそうとすることが、「点睛」なのです。この有明高専を改装するにあたり、そのプランを練る為に、図書館運営のスタッフと何度も何度も討議し、それに要した時間は大変なものでした。又、近隣や他県まで足を伸ばし、公立図書館や大学、高専の図書館を視察・調査を重ねました。そこで得た事が今回の改装に大きく寄与していることは当然ですが、それ以上に深く思い知ったことは、どんなに建物として立派な図書館でも、それを利用し、活用する人間がいなければ図書館としての魅力は皆無だという事でした。

有明高専を改装するにあたって一番心掛けた事は、学生諸君、教職員、そして一般開放をしている市民の方々が集える場所、書という空間の中で憩える場所の創設でした。その一つの試みとして個室感覚で学習・閲覧できる机の配置・スタンドの設置、そして廃材となろうとしていた机そのものを大川の家具メーカーの方々の尽力で再利用してもらい、新しい机が再生されたことです。今迄何十年と使い続けて来たものに又新しい生命が宿りました。このように図書館を利用する皆さんの力で「魂」を入れて欲しいのです。ずっとずっと長くとおしんでもらいたいです。

一階の美術ギャラリーも大きく変貌を遂げました。今このギャラリーに大牟田美術協会のプロの皆様の作品を展示していただき、ギャラリーとしての生命が宿っています。この図書館棟をいとおしむ気持ちを皆さんと共有しましょう。そして持続させて行こうではありませんか。

私はこの3月で図書館長という職を降ります。4年間という時間の中で、今回のような大仕事に加担できたのは、本当に幸せでした。こうして形の出来た図書館棟に今度は、図書館本来の機能である「書との邂逅」の楽しめる空間作りに、その利用者である学生諸君の力を貸して下さい。そして、この有明高専図書館が、地域に、又、全国の高専、大学の図書館の一つのモデルとなるような誇れるものに発展出来ることを心より願っています。

# 特集

耐震改修工事のため、昨年7月から今年1月までの長期にわたり図書館は閉館していましたが、この2月より装いも新たにリニューアルオープンしました。そこで、本号特集では、新しくなった図書館を紹介します。

# 新しくなった図書館紹介



**入口** 玄関ドアおよびエレベータ側ドアともに、自動ドアとなりました。

## 図書館棟1階



**ロビー** ロビーはこれまでのデザインをほぼ踏襲し、青を基調とした色合いとしています。引き続き、テーブルと椅子は、地場大川で購入した手作りのものを置いています。木独特の暖かさと座ったときのかっちりとした感触を実感してください。



## 外側通路

建物の外側に板張りの通路を設け、玄関ドア、エレベータ側ドアどちらからでも、バリアフリーで入館できるようになりました。



1階廊下のデザインを新しくしました。

## 廊下



また、2階廊下の位置が、旧図書館の配置から大きく変わりました。新図書館では2階廊下は窓側に設置されたため、随分と明るい感じになりました。



## 美術ギャラリー

図書館1階には、ロビーや廊下、セミナー室内、多目的室内に、大牟田美術協会の方々のご協力による、たくさんの美術作品を展示しています。

展示スペースには、間接照明とスポットライトを設置しました。

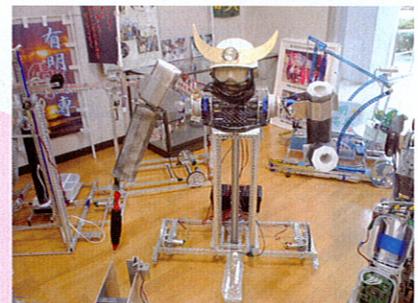


図書館2階廊下にも、美術作品を展示するスペースを設けています。



## 有明高専 工房ギャラリー

ロボコン参加のロボットなど、学生製作の作品を展示するスペースです。



## セミナー室 多目的室



1階にあるセミナー室、多目的室は、主に少人数での講義室や会議室として利用します。室内には、美術作品も展示しています。

# 図書館棟2階



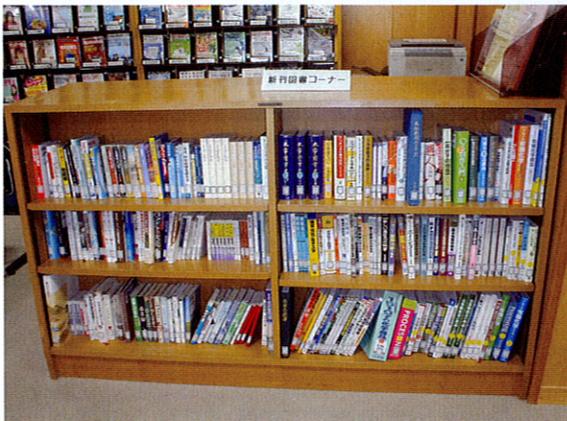
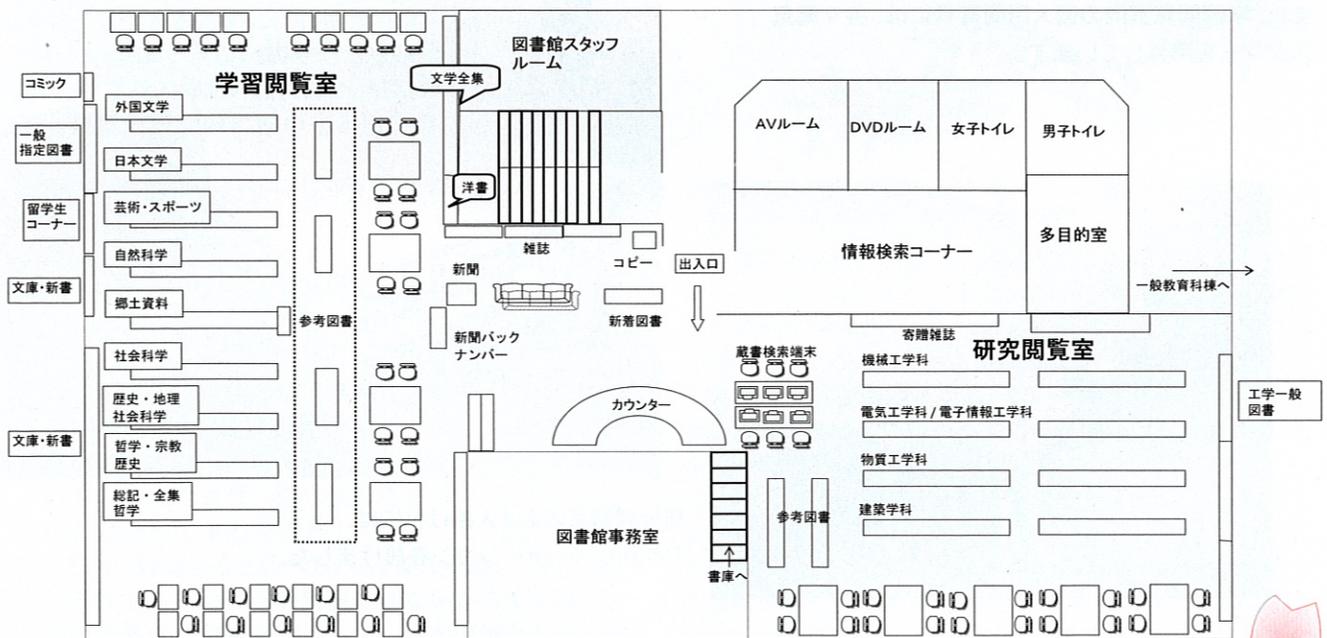
## 閲覧室入口

2階閲覧室入口にドアが付きました。ここからお入りください。



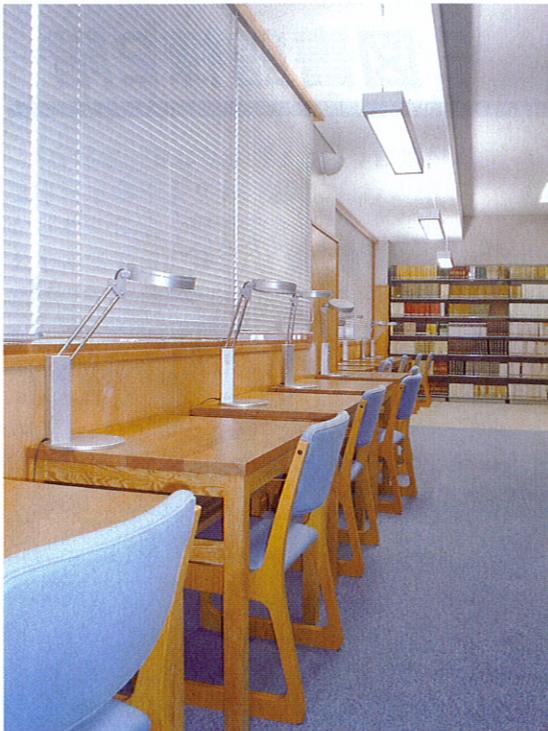
## 受付

受付カウンターも新しくなりました。



## 新着図書コーナー

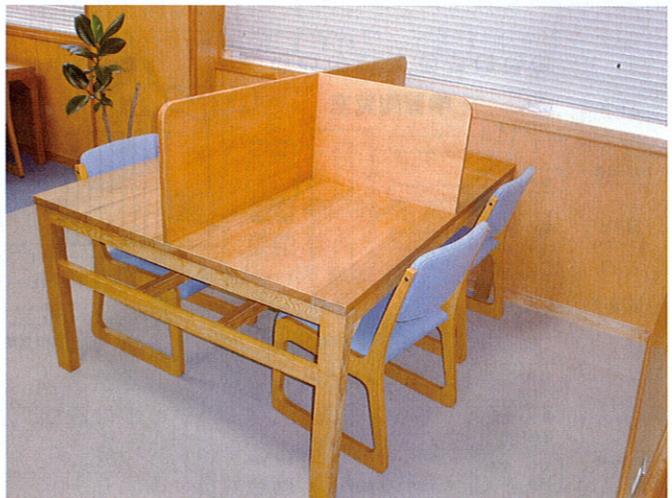
新着図書コーナーを閲覧室入口近くに移動し、目立つようにしています。



### 閲覧机

机はこれまで使っていたものを設置していますが、新しく天板の張り替えを行いました。

また、学習閲覧室内の個人用閲覧机には、各々電気スタンドを用意しています。



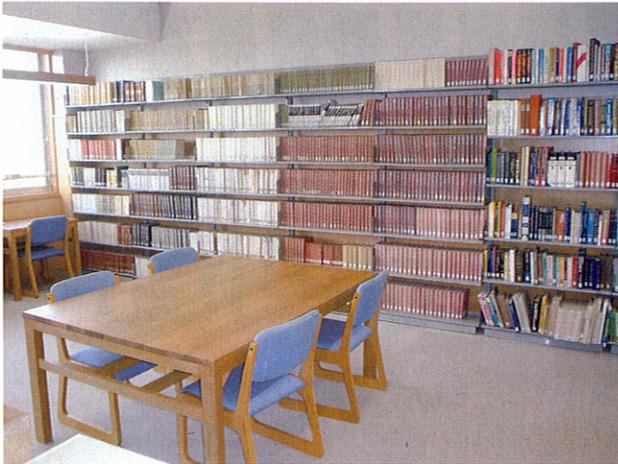
研究閲覧室内の4人掛け机には、T字型のパーティションを設けました。



### トイレ(2階)

女子トイレが、2階にも設置されました。



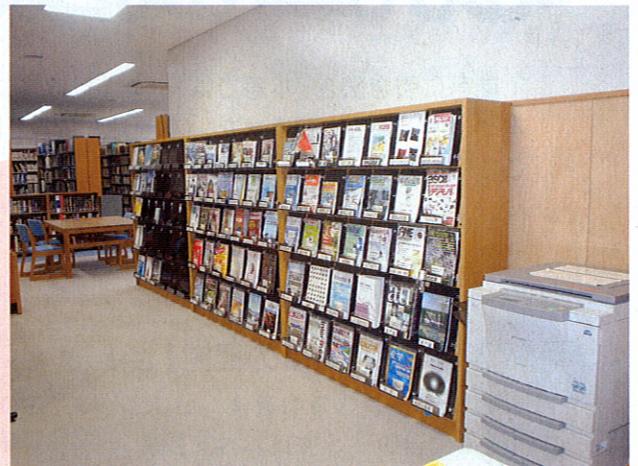


## 文学全集書架

旧図書館では、図書館長室に別置していた文学全集を、学習閲覧室の壁面書架に並べました。どうぞご利用ください。

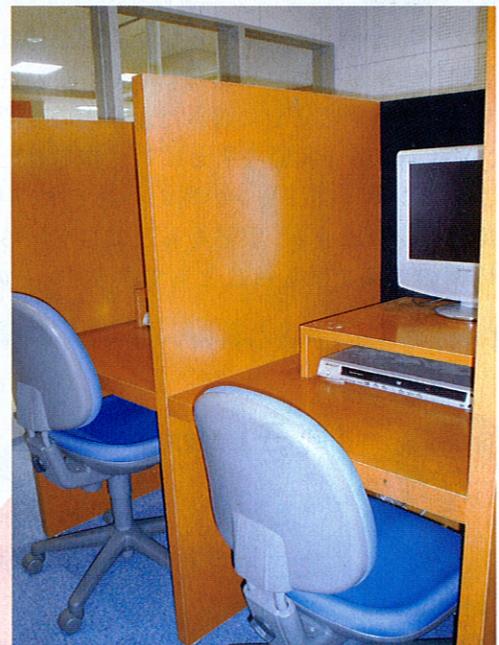
## 雑誌書架

雑誌書架は、これまで学習閲覧室と研究閲覧室に分散して設置していましたが、これを一箇所にまとめ、ブラウジングスペースとしました。



## 文献検索コーナー

旧図書館で、AVルーム内にあった検索端末を、すべて閲覧室内に移設しました。自由にご利用ください。



## AVルーム

一人でDVD等を観る場合は、AVルームの個人用ブースをご利用ください。ヘッドホンを着用していただきます。利用できる資料は、館内にあるDVD等に限りです。

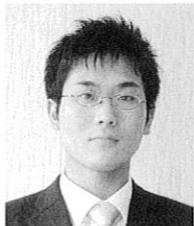


## DVDルーム

42インチの大画面モニターを設置し、4人まで同時に利用することができます。利用できる資料は、館内にあるDVDに限りです。

# 新任教員推薦図書

前号に引き続き、本号では、昨年4月以降に新しく着任された先生方にご自分の印象に残った本や、ぜひ学生に読ませたい本を選んで、エピソードなども交えつつ推薦していただきました。ここで紹介する本は、図書館にも揃えていますので、ぜひ手にとってみてください。



『V字回復の経営』三枝 匡 著

建築学科 飛田 国人

企業の業績が悪化した後、著しく業績を伸ばすことをV字回復といいます。本書は、経営不振の企業が業績をV字に回復するまでに起きた企業内の変革プロセスを、著者の経験と実話をもとにして作られたフィクションとノンフィクションの間の小説です。中には難しい部分もありますが、実話をもとにしているので企業の内情の一例を感じることもできます。その上で、

本書の登場人物と自分を照らし合わせ、自分はこういった社会人になりたいのかをイメージして欲しいと思います。

また、自分自身を一つの企業だと考えたとき、現在の業績は好調でしょうか、不調でしょうか。そして、今後はどうしたいのでしょうか。もしかしたら自分の何かを変える必要があるかもしれません。

「2年で変われなければ、10年たっても変われない」《本文より抜粋》

上記の文章は少し極端ですが、何かを変えたい、したいなら、そのくらいの覚悟を持って行動することが大事だと思います。私は、学生のみなさんが変わるお手伝いをしたいと考えています。



『荀子』岩波文庫：金谷 治 訳注

一般教育科 高本 雅裕

おかしな話ですが浪人時代の一時期、三国志に夢中になっていました。数式や英単語が全く出てこない分野に癒しを感じていたのかもしれませんが、それ以来中国古典が好きになり、今でもちょっとした時間に読んでいます。

さて、ここに紹介する「荀子」は三国志のような歴史物語ではなく、純粋な儒教の本です。儒教といえば堅苦しいお説教というイメージですが、この本は「人間の天性は悪である」というかなり強烈な思想を基調としたある意味「異端の書」とも言うべきもので、全く退屈を感じさせません。

「人間を放っておくと社会が混乱する。だからこそ教育・学習が重要！。人は礼・義を学んで初めて社会の一員として活躍できる。」と荀子は強く説いています。言うなれば「中国版・学問のすすめ」といったところでしょう。

また、「天変地異を恐れるな。昔からあったことだから」「雨乞いしても雨は降らない。雨乞いしなくても雨は降るから」等々、2千年以上前の人とは思えないクールな思想（半ば屁理屈？）も魅力です。

性善説をバツサリ切り捨てたこの本、何か人間不信に陥りそうですが科学・技術を志す身としてはこのようなシニカルな視線を持つておくのも悪くないのでは？。

現代の日本語に書き下した解説付きの本も多く、また物語ではないので、どのページからでも読める気軽さがあります。バスや電車の中の10分にいかがでしょう。

ちなみに、この本の書き出しは有名な「青は藍より出でて藍より青し」です。学生の皆さん、期待しています。

平成19年度

# 校内読書感想文コンクール

## 感想文コンクール講評

図書館長 焼山 廣志

この講評文を執筆するにあたり、いつも述べている事だが、「読書感想文」を書こうとする時、その著者に、その書への思い入れ、ある種の感動、衝撃などの心に響くものがなければ、読み手にそれを伝えられないということである。通り一遍の粗筋をなぞったもの、他の人の手による後書き、書評などを引用、敷衍したような一文で原稿用紙を埋めることは出来てもその思いは読み手に伝わらないのである。

昨今はIT機器、とりわけ携帯電話の普及などにより以前にもまして活字離れが叫ばれて久しくなるが、本当に今の若者が書を読まなくなったのだろうか、「読書感想文」と言ったフォーマルな読書の所感を述べるような一文が書けなくなったのだろうか。

実は、今年、プロの俳優によるCDの朗読文を聞かせる取り組みをしてみた。時間にして5分足らずの短い一話である。それを聞いた後の所感を述べることを求めた。それもメモ程度の用紙に5分位で書くことが条件であった。学生の心に感じたことを文字に直してみるトレーニングのひとつのつもりだった。ところがその俳優の朗読文でとりわけインパクトのある一話と思われるものには多くの学生が、こんなにも書けるのだろうか、と驚くほどその感動の思いを一文にして伝えてくれたのである。「心に響くものに遭遇すれば自ずとその思いが泉のごとく言葉として湧き出てくるものだ」ということを改めて認識させてくれた。そして一方で、そうした書との遭遇を促すような機会を“本を読まなくなった”と嘆く大人たちは与え続けている努力をしているのだろうか。そうした疑問が逆に生じてきた。

今回、平成19年度の本校の読書感想文コンクールには全校学生中、600名の応募者から最優秀賞1名、優秀賞1名、佳作6名の合計8名の学生がめでたく選出された。心より祝福したい。この入賞者の作品を読んでみて共通することは上記で述べた「心の琴線に触れた書と遭遇した筆者の熱い思い」が、直に伝わってくることである。その対象として作品は様々だが、その一つ一つが入賞者の今までの生い立ちと複雑に絡ませ、織り込みながらその書から受けた思いを、誠実に、また真摯に文字になされている点が高く評価されたものだと思う。

とりわけ今年度は一年生の健闘が目を引いた。有明高専の将来に大きな光を見る思いがする。次年度も一人でも多くの学生諸君がその熱い思いを文字にする行為を継続してくれることを願って止まない。

最後に、この感想文コンクールの入賞者選出に尽力頂いた、クラス担任の先生方、図書館スタッフの教職員の方々、国語科の先生方のご支援に改めて深謝申し上げる。

## 入賞者

|       |            |       |             |
|-------|------------|-------|-------------|
| ■最優秀賞 | 2年2組       | 牛島 由夏 | 『夏の庭』を読んで   |
| ■優秀賞  | 電子情報工学科 3年 | 長尾 美瞳 | 『蠅の王』を読んで   |
| ■佳作   | 機械工学科 1年   | 飯川 翔平 | 『野火』について    |
|       | 機械工学科 1年   | 河内 拓也 | 『国家の品格』藤原正彦 |
|       | 2年4組       | 江藤 紅音 | 本質を見極める力    |
|       | 電気工学科 1年   | 坂本 大季 | 『野火』を読んで    |
|       | 物質工学科 1年   | 椋島 李歩 | 人間の感情       |
|       | 機械工学科 4年   | 三原 徳馬 | 『夏の庭』を読んで   |

## 入賞作品紹介

### 最優秀賞 『夏の庭』を読んで

2年2組 牛島由夏

「生きているのは、息をしているってことだけじゃない…」主人公は、「生きる」とは何か、「死」とは何か、問い質します。

「生きる」ということ。それは人と人との関わりの中にあるものだと思います。確かに「皆、ひとりで生きていく」とか「ひとりでいられる強さを持つ」とかいう言葉を耳にします。しかしそれは、人と人の関係が常に変わりゆくものだからではないでしょうか。人と関わりあって初めて、社会の中のひとりとして生きていけるのです。人と人の関わりは、時に人生に様々な影響を与えるでしょう。

余生をひとりで過ごし、ひとりで死んでいくはずだった老人は、人との関わりを断ち切っていました。しかしある日、3人の少年が現れました。いくら死の「観察」とはいえ、少年達との会話は、冷えきっていた老人の心を徐々に温めていったのでしょうか。それが、老人が生きる価値を見出し、生き生きとしていった理由だと思います。

少年達はこの夏、望み通り「死」を見ました。少年の目からは涙が流れました。少年達が心に抱いていたのは、最初

の頃の好奇心ではなく、身近な人に対する悲しみでしょう。それほど、老人との関わりは、少年達に貴重なものを得させ、少年達の心に深く刻み込まれていたのだと思います。少年達の夏は、老人との別れとともに終わりを告げました。

私も祖母が亡くなったとき、酷く衝撃を受けました。それは、祖母と二度と会うことはない悲しみであり、死というものに対する恐怖だったのかもしれませんが。私は棺の中の祖母に触れることが出来ませんでした。ついさっきまで動いて、話して、息をしていたのに、今は全く動かない。ヒトって何。生きているものがヒトなら、目の前にいる不動の祖母は…。私は只々、怖かったです。

このように身近な死に直面すると、こうした疑問が次々と湧いてきて、「死」というものを全く理解できていないことに気付くのです。死に疑問を抱く主人公の心境にとっても共感しました。

死ぬというのは当たり前です。しかし人は生きている意味を問わずにはいられません。きっと人は、生きる意味を追い求める存在なのでしょう。

この本は、「生きる」という事をいろいろな角度から考える大切さを教えてくれました。少年達もあの夏の庭でそれを教えられ、大きく成長したのだと思います。

### 優秀賞 『蠅の王』を読んで

3年 電子情報工学科 長尾美瞳

人間というものはとにかく難しい。人間は生物であるのだから、もちろん本能に従って生きていく。しかし、人間が自らによって形成した社会という輪の中では、本能よりむしろ理性を中心に生きていかなければならない。そう考えると、この世の中がとても矛盾しているように思えてくる。もう少し、自分のやりたいことをしたって良いのではないか。それが多少法を無視していても、自分がやりたいのならして良いのではないか。

頭の隅にそんな考えを持っていた私が数日前に読んだ本。それが『蠅の王』だった。最初は、ただ怖い話を読みみたいと思って手に取っただけだったのだが、本を読み終えた私の頭には、人間に対するなんとも言えない不快感が残っていた。そして、私が切に感じたことは、「人間が一番怖い」だった。

蠅の王。それはどんな人物の心にも存在している獣だ。彼は私達の中に常についてまわり、強い力で私達を従わせようとする。それは、善悪の判断を狂わせ、人間関係を全て壊してしまうこともある。人間の怖さというのは、「蠅の王の囁きに負けてしまえば、同じ様に生きている人を自分のために平気で利用してしまうこと」、そして「蠅の王は誰の心にも必ず存在していること」だろう。誰の心にも在るということは、誰が彼の力に屈するかわから

ないということでもあり、それは友人や家族だったり、もしくは自分かもしれないのだ。蠅の王という名の本能、それは私達が生物として生まれたときからずっと私の心の中に居続けるのだろう。

とすると、私が最初に書いた文、今まで頭の隅にあった考え。自分がやりたいことをしたって良いのではないか、というその文こそが蠅の王の囁きであるのかもしれない。前述の声は、本能の声ではないのだろうか。

ふと私の頭に一つの単語が浮かんだ。「性善説」。人間の根底は善であるという考えだ。私はこの考えから抜け出せないようだ。

人間とは、「性善」ではない。かといって「性悪」でもない。きっと、その2つを合わせもって生まれてくるのだろう。「善」の部分と「悪」の部分とが存在する。だとすれば、前述の意見にもこの2つの部分が存在するのだ。どちらも、私の一部であり、その近衛を保つのも私なのだ。頭の隅にある考えが正しいかどうかは、もうしばらく私の中で検討したい。

蠅の王を恐れてはいけない。この獣は誰の心にも存在するが、誰でも制御することが出来るのだ。まずは、よく判断すること。これが出来れば自分は自分であり続けられるし、周囲の人々を人間として保たせることも出来るのだと、私は思う。

## 佳作 『野火』について

1年 機械工学科 飯川翔平

『野火』は、作者の大岡昇平が自らの戦争での体験を基に書いた作品です。太平洋戦争時のフィリピン戦線を舞台に、肺病になり部隊から追い出された田村一等兵の目線から書かれています。

6本の芋を渡されて部隊を追い出された田村は、「死」を感じながら、そして飢えて苦しみながらフィリピンを彷徨い歩きます。生きるために生の芋を食べ、草を食べ、自分や他人の血を吸った山蛭まで食べ、ついには人間の屍体をも食べたいと思ってしまうほどに飢えに苦しみます。

この『野火』は戦争についての小説です。だから、戦争の悲惨さや恐ろしさはもちろん伝わってきます。しかし、僕にとっては、戦争の恐ろしさよりも、その戦争によって変わる、田村や他の人々の心や行動のほうが、より恐ろしく、印象深く感じました。

特に印象深かったのは、「人の肉を食べるか」ということでした。僕たちが普通に生活をしていくなかでは、死ぬほど飢えるということは滅多にないことだろうし、それによって生きるために人肉を食べる、ということは考えづらい、想像できないことだと思います。

また、中学校の国語の教科書で、難民の小さな男の子が、自分も栄養失調なのに他の子どもに自分の粥を分け与

えていた、というのがありました。それを初めて読んだとき、「人は苦しいときこそ、人らしさがでるものなのかなあ」と思ったことを覚えています。

しかし、ここでは人々は殺しあい、同僚の肉をも食べます。また、主人公の田村は、味方が敵にやられているのを見て高笑いしたり、河原に食べられた人々の足首などを見つけても驚かなかったりします。そういうのを読んでいると、単純に「この人たちは狂ってる」と思い、少し恐い気もしました。

戦争では、人が人を殺し、又は人に殺されます。しかし、戦争での被害はそれだけでないと思いました。この小説に登場する田村や他の兵士達は、普通の人でした。ささやかな悩み事を持つ、普通の人でした。しかし、そんな彼らを、人を殺したり食べたり、「人間らしさ」をなくすほど追いつめたものは、戦争以外ありえません。

「戦争を知らない人間は、半分は子供である。」「野火」の後半に書いてあった言葉です。僕は『野火』に書かれたような体験はしたくないし、誰かにさせたくもありません。実際の戦争を少しでも知って、それをおこさない、おこさせないようにしなければいけないと、『野火』を読んでそう思いました。



## 佳作 『国家の品格』藤原正彦

1年 機械工学科 河内拓也

この本『国家の品格』は、少し前にベストセラーになった本である。時期は少々遅くなったが、この機会に読んでみる事にした。

この本の中で著者は、どんな論理であれ、論理的に正しいからといってそれを徹底していくと、人間社会は、ほぼ必然的に破綻すると述べている。論理を通していても、それが本質であるかどうか判断できないからである。アメリカの具体的な例を挙げながら、日本の例として、ゆとり教育によって公立小学校で始まった英語教育を、真っ向から否定している。著者は、小学校から英語を教えることは、日本を滅ぼす最も確実な方法であると断言している。小学校からの英語教育に関しては、私は良いことではないかと思っていた。だが著者は英語というのは、話す手段でしかない。国際的に通用する人間になるには、まず国語を勉強すること、とりわけ本をたくさん読む事が不可欠であると進言している。この考えには、納得させられる。本を読むということは、知識や教養を身につける事が出来、さらに日本の歴史や伝統文化までも学ぶ事ができる。これまでにどんな本を読んできたか、そしてどのような恋愛、失恋、片思いを経験してきたかなどいろいろな経験が、その人の情緒力を形成し、論理の出発点を選択させている。この出発点がずれてくると、間

違った結論に至ってしまう。途中で、論地の修正が可能ならいいのだが、エリートと言われる者の中には論理的思考ばかりが優れていて、情緒が欠如しているタイプの人間が存在する。この場合、出発点が誤っているのだから、結論は絶対的な誤りとなる。若いうちにいろいろな本を読み、文化を学んで薄っぺらな人間ではなく、中身のあつた人間になれという著者の叱咤激励に感じた。

また、論理だけでは破綻する理由に人間にとって最も重要なことの多くが、論理的に説明できないと述べている。著者は、数学のなかにも「不完全性定理」という理論では説明できない命題が存在していると紹介している。まして、この世の中で、論理では説明できない事があるのは当然だと述べている。「卑怯だから」ということや、「人を殺してはいけない」ということがこれに該当する。「駄目なものは駄目」なのである。そこに論理では説明できないし、説明など必要ないのである。

読み終えて、内容としてはかなり過激な部分もあるが、爽快感があった。これらの日本の進むべき道を憂い、著者の祖国愛が大いに感じられる内容でもあった。私は今後、今以上に知識や教養を身につけて、日本に育った誇りを持って生きていこうと思った。

## 佳作 | 本質を見極める力

2年4組 江藤紅音

「百聞は一見に如かず」という言葉がある。人の話を何度も耳で聞くよりも、現実に関心する目で見ると確かめる方がはるかによく理解できるという意味だ。この本の主人公である溝口の身には、悪い意味でまさにこの言葉通りのことが振りかかった。幼い頃から父より何度も聞かされてきた金閣は、彼の中で何よりも美しいものと化し、その存在は絶対的なものとなった。しかし学生になって初めて実際に見た金閣は、彼の中にあつたそれよりも格段に劣っていたのである。

私たちの身にもこれと似たようなことが起こり得る。例えば、美味しい美味しいと散々聞かされていたものを実際に食べてみたら、そうでもないと感じた経験はないだろうか。この場合好みの問題も多少は関係してくるだろうが、それ以上に、何度も聞かされることによって自分の中で勝手にイメージがふくらみ、完璧な虚像が作り上げられてしまったことが原因のように思われる。そのため実際に触れた時、想像上のものとのギャップを感じ、どこか裏切られたようにさえ思うのだ。つまりは実像は完璧な虚像に勝つことができなかつた。このようなことは感受性の強い人に特に起こりやすい。

溝口もその一人だつた。持って生まれたコンプレックスを克服できず、誰にも理解されないことを唯一の個性

としていた彼は、人一倍感受性の強い人間に育つた。そして実像の金閣は溝口の中で作られた虚像に勝つことができずに、彼の手によって放火され、その美しい姿と長い歴史を失ってしまったのである。

この場合、実像に罪はあるのだろうか。文中で溝口は「金閣が悪いのだ」という意の言葉を何度も残していたが、それは明らかに彼の勝手なイメージによるものだ。実像の金閣は、何一つ変わることもなく昔からそこにあり続け、そして未来永劫存在し続けるはずだつた。その未来を奪つたのは他でもない溝口なのである。

私たちが裏切られたと感じるのはどんな時だろう。もちろん本当に相手が裏切ってしまう時もあるだろうが、それよりも自分が過大に期待し過ぎていた際に相手がそのラインに届かなかつた時そう感じることも多いのではないか。これは先程述べた溝口の行為と同様のように思われる。相手は何も悪くないのだが、自分の勝手なイメージで相手を判断してしまう。このような行為は極力避けるべきだ。

大事なことは、そのものの本質を見極める力を持つことだと思ふ。自分であれこれと想像するのも大切だが、それで本当のことを見失うようであつてはならない。常に本質と向かい合い、その上でそのものと上手に付き合つていきたいと思ふ。

## 佳作 | 『野火』を読んで

1年 電気工学科 坂本大季

この『野火』という作品は、太平洋戦争中フィリピン戦線で結核におかされ、わずかに数本の芋を渡されて本隊を追放された田村一等兵の話だ。彼は、ひたすら彷徨い、極度の飢えに襲われ、自分の血を吸った蛭まで食べたあげく、友軍の屍体さえ食べようとした。一人の男の異常な戦争体験がこの本には描かれている。

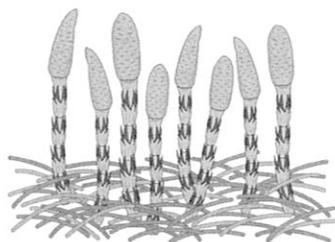
僕はこの作品を読みながら時々、胸が痛んだ。今とあまりにもかけはなれた日常、身近すぎる死。それらが心におさまっていく感じだ。しかし、この作品は今ではテレビで見たり、漫画や本で読んだ戦争ものとは少し違つた。原爆や、空襲、沖繩戦などをテーマにしたものは、たいして戦争の悲惨さや平和の尊さを感じとることができる。だが『野火』ではそれを深く感じとれなかつた。実際に戦場に出た一人の男の葛藤の日々、生と死の狭間で何を考え、どうするかという言葉では言い表せない、とても難しく深い内容だつた。

特に心に残っているのは、最後の場面で戦友の永松が人食い人種だと知り、彼を殺そうと銃を握つたところだ。そこに、「もし人間がその飢えの果てに、互いに食い合うのが必然であるならば、この世は神の怒りの跡にすぎない。」と書かれている。この言葉の意味は正直あまり分からない。しかし、人を殺すというのは戦争とか偶然とか社会とか

自分以外の力も加わつた結果であるが、食べるというのは自分の意志のみなので神が許さないとしようという意味だと思ふ。実際に僕がその時代の人間でそういう状況にたたされても食べられなかつたと思ふ。

僕にとって、この『野火』はかけがえのない作品になつたものだと思ふ。一度読んだだけでは分からない所もたくさんあつたけれど、これほど真剣に本を読んだのは初めてで、戦争についてまた考えることができた。

現在では、戦争の事など多くの方が考えずに、平穏な暮らしを行っている。しかし、世界のどこかの国では内戦や抗争がまだ行われている。いつ起こるか分からないのが戦争だ。だからもっと危機感を持って生きていかなければいけないと思ふ。食べたい物は腹一杯食べられて、病院に行けば治療してくれる。そういう今の社会に満足し、感謝しなければならない。戦争は間違っている。この当たり前のことを、誰もが言えるなら、本当の平和は訪れるだろう。



## 佳作 | 人間の感情

1年 物質工学科 花島李歩

ある所に、禅智内供という鼻のとても長い者がいた。内供はどうかして鼻を短くしようとし、遂にそれは実現する。しかし、まわりの者からは、前よりいっそう笑われてしまい、内供の悩みは消えなかった。

『鼻』は、このような小説である。私は、内供とそのまわりの人々の感情の変化、態度や行動のとり方は、人間のありのままの姿であると思った。また、それは私自身も同じく共通する部分があるように感じた。

まず、一つ目は、人と同じでない不安になることである。内供は、自分と同じように鼻が長い人を探し出そうとした。結局、そのような人はいなかったのだが、もしいたとすると…内供は今までの不安や悩みが一気に解消したに違いない。

二つ目は、人の目を気にするところである。これは、前にも述べた「人と同じでない不安になる」というのと同じだ。自分がどうなのかは関係なく、相手にどう思われているのかをまず一番に考えてしまう。その分かりやすい例がファッションや歌などの「流行」であると思う。自分が好きではなくても、みんながやっていることは自分もやる。現代は、まわりの目を気にしすぎているくらいだと思う。

三つ目は、自分の利益の追求を最優先にする考え方を

持っていることだ。他人の不幸を軽い気持ちで眺めていることは、気付かないうちによくあるかもしれない。内供のまわりの者が、内供の鼻が短くなくても笑ったのは、相手を小馬鹿にして自分が勝ったような気持ちになりたかったからではないかと思う。最後に内供の鼻は、また長く元にもどり、「こうなれば、もう誰もわらうものはないに違いない。」と自分にささやいた。しかし、私は、内供は絶対にまた笑われて不快に思うに違いないと思った。まわりにいる者たちの利己主義が無くならない限り、内供は笑われ続けるだろう。

この小説を読んで、人間の気持ちとは、複雑だけれど案外単純に変わるものなのだとことに気付いた。しかし、だからこそ、自分の気持ちを人に伝えたり考えを行動に移すときは、もう一度冷静になって本当に良いか考え直さなければいけないと思う。また、他の人の言うことに惑わされる内供の弱さも私にもあることだから、人の言うことに惑わされず、常に自分の気持ちを大切にするようにしたい。



## 佳作 | 『夏の庭』を読んで

4年 機械工学科 三原徳馬

私はこの本を読みながら、主人公のように寝るときに息の数を数えるというのを、やったことを思い出しました。最も私の場合は途中で寝るのではなく、数えるのが面倒になって、やめてしまったのですが。

私が小学生の時は主人公達のように死んで行く人を見てみたいとは考えなかったけれど死ぬということについていろいろ考えたことはあります。人はなぜ死ぬのか、死ぬとどうなるのか、今ある自分の意識はどうなるのかと、結局死ぬのは怖い人が人である限りいつか死ぬ、だからこそ今という時間を大切に、精一杯生きていくしかない、と、道徳の教科書に書いてあるような結論しか出ませんでした。それがそれでよかったのだろうと、今では思っています。

私はここ3年間連続で祖父、祖母が、春休みの間に亡くなってしまうという、不幸が続く死というものを見てきたのですが、特に最初に亡くなった、父方の祖父の時は、夜中に電話がかかってきて祖父が死にそうだと連絡を受けた時、両親に付いて行くか行かないか少し悩んだがついて行くことにしたのは本当に良かったと思います。祖父には小さい頃から面倒を見てもらっていたし祖父がいなければこの学校に入ることもなかったと思います。そんな人として非常に尊敬していた大切な人だからこそ死ぬ時居合わせる事ができたのは主

人公達のように死ぬその場に居合わせられなかったのに比べれば本当に良かったと思います。

大切な人を失ったと非常に残念に思いましたが、不思議と涙は出ませんでした。家に帰り弟達に祖父の死を告げた時も弟達は泣きませんでした。そして御葬式の「お別れの言葉」を孫代表として言うことになったのですが、紙に書いていたことを読み始めたとき涙が止まらなくなり上手く言えずに終わり、席に着いてみると今まで全く泣いていなかった弟達が泣いていました。今思えば主人公がブドウをお爺さんの口に押し当てて死を受け入れるまで泣かなかったように、私も弟達も祖父の死を理解していたが受け入れていなかったのだと思います。「お別れの言葉」で私も弟達も初めて祖父の死を受け入れたのでしょ。

お爺さんが亡くなった時と同じように祖父が亡くなった時の顔も安らかなものでした。最初は今にも死にそうだったお爺さんも、主人公達との交流で死ぬ前に人として「生きる」ことができて良かったのではないかと思います。祖父の死やお爺さんの死のように私も死ぬ時は安らかに笑顔で死ぬことができればいいなと思います。そのためにも毎日を一生懸命生きていくことが大切なのだと思えて考えさせられました。

## 審査員講評

### 図書館長補佐・物質工学科 藤本 大輔

昨年度に引き続き今年度も読書感想文の審査員をさせていただきました。皆さんの若い感性で表現された感想文の中には、雑誌や新聞での本の紹介文よりもその本を魅力的に見せる文章が多く今年度も審査後に本を読みたくなりました。また、授業などの学生生活では分からない、皆さんが日ごろ考えていることの片鱗を見れたような気がして楽しかったです。若いときにはいろいろなことを考えることが大切です。その一つの手段として読書はいかがでしょうか。

### 機械工学科 岩本 達也

本の読んだ感想は一人一人違います。同じ本を読んでも全く違った感想になることもあります。どんな感想を持つかは自由です。大切なのは、自分の思ったことをいかにして相手に伝えるかだと思います。

感受性豊かな10代の君たちが、本を読んでどんな感想を持ったのか、どんなことを考えたのか、ということに興味を持って読みました。今回も40編ほど審査を行いました。おもしろい作品が多く、大変楽しませていただきました。入賞した作品には、特に素晴らしいものが揃っています。ぜひ読んで参考にしてください。

### 電気工学科 池之上 正人

「モノの考え方、感じ方」が変わる瞬間は様々ある。この瞬間との出会いは自分を成長させるチャンスであり、本を読むこともこの瞬間の一つであると私は思います。

さて、今回多くの感想文を読み、様々な「モノの考え方、感じ方」に触れさせていただきました。「モノの考え方、感じ方」を素直に自分の言葉で表現できている作品が多く、表現力の高さに感心させられ、また同時に皆さんの成長も感じる事が出来ました。皆さんが今後、さらに多くの本を読み、さらに自分を成長させる機会をたくさん作ってくれることを期待しています。

### 電子情報工学科 松野 哲也

読書感想文とは何でしょうか？自分がある作品をどのように解釈し、限られた文字数のもとで、どのようにその作品を再構成することができるのか、という困難な問題を解決してみせること。読書感想文とはこのようなものだと思います。この難題を解いたことを人に見せて、自分の考え方を人に伝える、あるいは問題解決のプロセスを通して自分の考え方を再発見する、これが読書感想文の意義でしょうか。

今回、皆さんの熱意のこもった文章を多く読むときに改めて考えてみました。私なりに「読書感想文論(大袈裟?)」を展開してみましたがいかがでしたでしょうか。当たり前!? 違う!? 足りない!? 上記の短い文章を読んで色々と考えることによって皆さんの読書感想文の書き方に变化(良い方向に)が出てくれば幸いです。

### 建築学科 鳶 敏和

どれも力作ばかりで、推薦図書を鋭く分析し、自身の置かれている状況や今までの経験を対照させ、さらに将来どうすべきかなど、個性豊かに表現されていました。反面、せつかくの紙面を余らせたり、キーワードだけを取り上げて持論を展開したりするなど、感想文の書き方や審査の在り方など、課題があることもわかりました。特に、多くの作品を順位付けすることは難しく、例えば、朝鮮戦争のとき、どの兵士を前線から帰還させるかを客観的に決めるために開発されたとされる「Guttmanによる一対比較の数量化法」を用いるなど、何らかの工夫が必要だと感じました。

### 一般教育科 山崎 英司

最近はやケタイ小説やブログなど、多くの文字が世の中にあふれています。学生の皆さんの感想文もそのような時勢を反映してか、既存のイメージにとらわれない自由で豊かな文章が多かったように思います。しかし携帯電話のメールのように自分の感じたことをただ原稿用紙に書くだけでは、誰もその思いを受け止めてはくれません。

「不特定多数の人に理解してもらえるように丁寧に書く」このような技術は社会での対人コミュニケーションに欠かせない技能の一つです。日頃から読書をたしなんで、先人たちの「思いを伝える手段」を学び取ってほしいと願っています。

### 一般教育科 河村 豊実

読書は映画・音楽と違って、本を読むことにより自分でイメージを作り出す読書力を必要とします。また、感想文はイメージから受けた感想を、話すのではなく文章として書く表現力が求められます。

読書感想文から、読んだ本の読者それぞれのイメージが伝わってきました。同じ本を読んで前回とイメージが変わった、ということは自分が変わり成長したからでしょう。感想は、現在の自分の視点から受けた感動を、場面ごとに話し言葉で述べたものが多かったように思います。

読書は知識を豊かにします。この次もぜひ頑張って応募して下さい。

### 一般教育科 岩本 晃代

今回の最終審査においては、とくに対象とした本のジャンルが多彩であったのが印象的でした。児童文学、戦争文学、外国文学、評論、エッセイ等々、とても興味深く読ませて頂くとともに、私自身の勉強にもなって、収穫のある審査でした。また、定番となっている本に対しても、新しい解釈を試みている点に感心しました。読書感想文には、読む人それぞれの体験やものの考え方が反映されます。若いからこそ、自信をもって、自分の考えを思い切って表現してほしいと思います。入賞作品を読んで、「いや、自分だったら、こう思う」と、よい意味での自己主張をしてみましょう。来年度の感想文を読むのが今から楽しみです。

# 図書館統計

## 平成18年度利用状況

| 月       | 4月    | 5月    | 6月    | 7月    | 8月    | 9月    | 10月   | 11月   | 12月   | 1月    | 2月    | 3月    | 合計     |
|---------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|
| 開館日数    | 23    | 24    | 25    | 23    | 16    | 24    | 25    | 24    | 23    | 21    | 22    | 21    | 271    |
| 入館者数 総数 | 5,107 | 6,930 | 8,297 | 6,578 | 3,853 | 7,869 | 5,530 | 7,503 | 5,799 | 6,026 | 7,008 | 2,533 | 73,033 |
| (内夜間)   | 897   | 1,452 | 1,528 | 760   | 0     | 1,537 | 957   | 1,486 | 957   | 1,101 | 1,373 | 47    | 12,095 |
| (内土曜日)  | 87    | 164   | 298   | 104   | 0     | 317   | 301   | 348   | 202   | 121   | 303   | 0     | 2,245  |
| 1日平均    | 222.0 | 288.8 | 331.9 | 286.0 | 240.8 | 327.9 | 221.2 | 312.6 | 252.1 | 287.0 | 318.5 | 120.6 | 269.5  |
| 貸出冊数 総数 | 580   | 852   | 849   | 831   | 319   | 630   | 679   | 773   | 642   | 721   | 511   | 189   | 7,576  |
| (内夜間)   | 154   | 239   | 241   | 173   | 17    | 169   | 135   | 187   | 140   | 141   | 130   | 17    | 1,743  |
| (内土曜日)  | 8     | 23    | 39    | 38    | 0     | 44    | 26    | 29    | 25    | 15    | 17    | 0     | 264    |
| 1日平均    | 25.2  | 35.5  | 34.0  | 36.1  | 19.9  | 26.3  | 27.2  | 32.2  | 27.9  | 34.3  | 23.2  | 9.0   | 28.0   |

## 分類別図書貸出冊数の推移

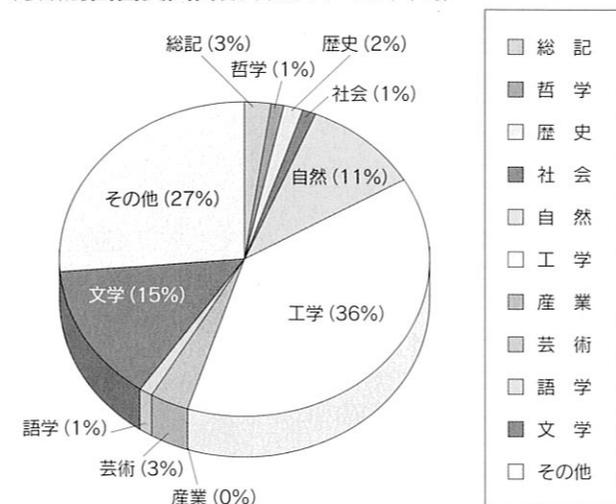
| 年 度    | 総記  | 哲学  | 歴史  | 社会  | 自然  | 工学    | 産業 | 芸術  | 語学 | 文学    | *その他  | 合計    |
|--------|-----|-----|-----|-----|-----|-------|----|-----|----|-------|-------|-------|
| 平成14年度 | 274 | 92  | 183 | 124 | 929 | 3,099 | 96 | 299 | 53 | 946   | 1,726 | 7,821 |
| 平成15年度 | 283 | 70  | 113 | 72  | 907 | 2,995 | 34 | 208 | 61 | 924   | 1,891 | 7,558 |
| 平成16年度 | 167 | 109 | 107 | 126 | 815 | 2,792 | 30 | 289 | 62 | 1,452 | 1,896 | 7,845 |
| 平成17年度 | 148 | 49  | 113 | 93  | 763 | 2,618 | 13 | 306 | 9  | 1,163 | 1,889 | 7,164 |
| 平成18年度 | 114 | 63  | 173 | 140 | 679 | 2,179 | 14 | 151 | 26 | 1,206 | 2,831 | 7,576 |
| 平均     | 197 | 77  | 138 | 111 | 819 | 2,737 | 37 | 251 | 42 | 1,138 | 2,047 | 7,593 |

\*「その他」は、文庫・新書および雑誌の貸出冊数を示す。

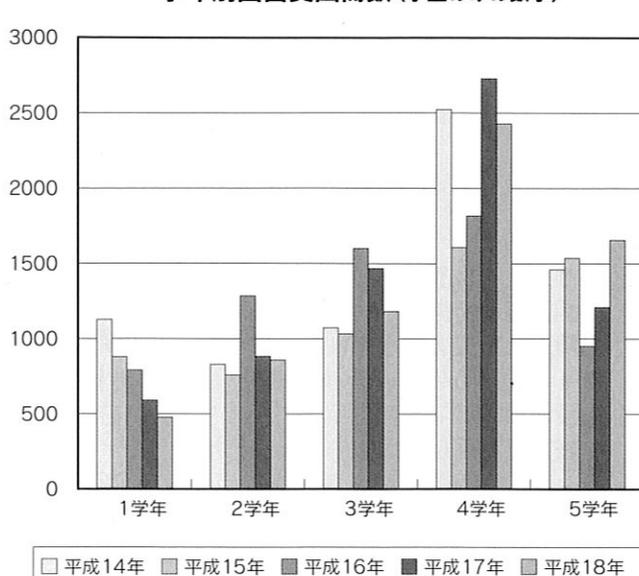
## 利用状況の推移

| 年 度    | 開館日数 | 利用登録状況 |       |        |          | 入館者数   |          | 貸出冊数  |              |          | 1日当たりの数値 |           | 1人当たりの数値  |             |              |
|--------|------|--------|-------|--------|----------|--------|----------|-------|--------------|----------|----------|-----------|-----------|-------------|--------------|
|        |      | 総数     | (内学生) | (内教職員) | (内学外利用者) | 総数     | (内夜間土曜日) | 総数    | (内学生のみの貸出冊数) | (内夜間土曜日) | (内学外利用者) | 1日当たり入館者数 | 1日当たり貸出冊数 | 学生1人当たり貸出冊数 | 利用者1人当たり貸出冊数 |
| 平成14年度 | 277  | 1,288  | 1,044 | 182    | 62       | 75,466 | 14,903   | 7,894 | 6,876        | 1,906    | 407      | 272.4     | 28.5      | 6.6         | 6.1          |
| 平成15年度 | 277  | 1,312  | 1,065 | 182    | 62       | 71,983 | 16,145   | 7,488 | 6,617        | 2,393    | 123      | 259.9     | 27.0      | 6.2         | 5.7          |
| 平成16年度 | 271  | 1,300  | 1,054 | 182    | 64       | 70,630 | 15,914   | 7,845 | 7,670        | 2,346    | 175      | 260.6     | 28.9      | 7.3         | 6.0          |
| 平成17年度 | 274  | 1,355  | 1,063 | 182    | 110      | 63,160 | 16,037   | 7,164 | 6,587        | 2,022    | 202      | 230.5     | 26.1      | 6.2         | 5.3          |
| 平成18年度 | 271  | 1,273  | 1,073 | 175    | 25       | 73,033 | 14,340   | 7,576 | 6,893        | 1,945    | 222      | 269.5     | 28.0      | 6.4         | 6.0          |

## 分類別図書貸出冊数 (平成14～18年平均)



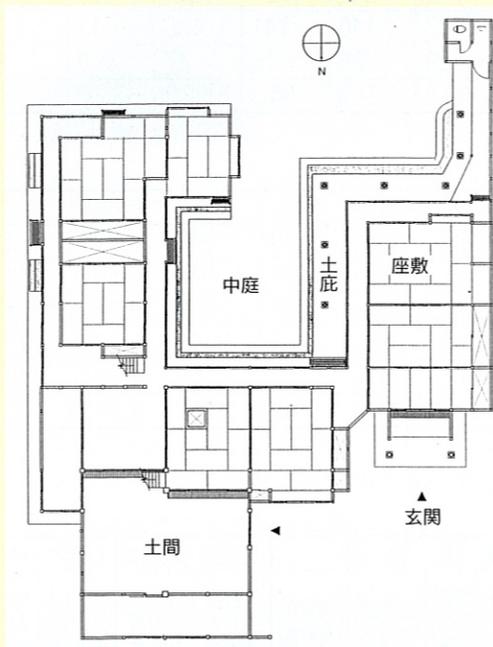
## 学年別図書貸出冊数 (学生のみの数字)



## 郷土の文化財

### 立花町指定有形文化財 旧大内邸

明治前期、大正初期・昭和初期増築  
福岡県八女郡立花町白木宮ケ原3245



1階平面図

旧大内邸は、矢部川の支流である白木川の上流、約5km入った山間の右岸に位置し、主要地方道玉名八女線に面した広大な敷地に建つ豪壮な住宅です。このような土地に明治10年代後半、立派な住宅を建設したのは旧柳河藩士で、白木村の初代の村長であった大内家10代大内精一郎です。長子の暢三は、明治末期から昭和初期に衆議院議員を務め、大正初期と昭和初期の2度にわたって増築を行っています。その結果、床面積が1階は331.51㎡、2階は137.97㎡という壮大な住宅に発展しました。

最初に造られた部分は広い土間をもつ2階建てで、差物を多用して豪農の住まいを彷彿させてくれます。大正期に増築された建物はずし二階で、9畳の座敷等があり、昭和期に増築された建物は平屋建て、入母屋造・妻入の立派な玄関が設けられ、5畳の玄関間・7.5畳の次間・11畳の座敷の3室が並んでいます。これら3棟で中庭が形成され、中庭に沿って縁側が巡らされています。

昭和期の座敷は床の間と付書院で飾られ、長押が廻され、部屋境には欄間があり、中庭には土庇が付設されて、接客空間としての体裁が整えられています。

天井の高さは、明治期が2.32m、大正期が2.57m、昭和期が2.84mと、少しずつ高くなり、柱の太さは、明治期の152mmに対して、大正期は136mm、昭和期は127mmと細くなっています。明治期の土間部分の2階と大正期の2階には天井がなく、大きな梁等を使った小屋組を見ることができ、建設時期の違いによる桁と梁の納まりの違いが解ります。

旧大内邸には華美なところがなく、質素で落ち着いた空間になっているのは政治家として活躍した大内暢三の考えを表現しているからだろうと思われます。(建築学科 松岡高弘)



外観



土間



座敷

## 編集後記

昭和47年に建設されて以来、本校図書館にとって初めての全面改修工事が行われました。そして、図書館は大きく変貌を遂げました。特に内装面について、利用者サイドに立った、より使いやすく、居心地のよい図書館を目指して、焼山館長、藤本館長補佐および図書情報係が一丸となって、徹底的に検討を重ねた結果、随所に工夫の凝らされたユニークな図書館ができあがったと自負しています。

このような経緯で、図書館報第13号では、この2月にリニューアルオープンしたばかりの図書館の施設・設備について特集を組んでいます。記事を読んで興味が湧いたら、ぜひ、実際に館内に足を運び、新しい図書館を利用してほしいと思います。

また、改修に伴い、美術ギャラリーの作品も総入れ替えを行いました。間接照明とスポットライトに照らされた、プロの作品の数々を、どうぞご堪能ください。

今後も、新しい図書館をどうぞよろしく願います。